

動物をめぐることばと表現(1)

一犬の雑誌にみられる性差別的表現とジェンダー表現

佐々木恵理

1. はじめに

かつては単なる「ペット」であった動物が、家族の一員として「コンパニオンアニマル（伴侶動物）」と認識されるようになって久しい。こうした状況に伴い、動物に関わる表現も「えさをやる」から「ごはんをあげる」に、「うちの犬」を「うちの子」と言うような擬人化が普通に行われるようになっていく。表現の是非はともかくとして、このように動物が擬人化されるときにはどのような特徴があるのだろうか。またそのとき、動物の性別と表現はどのような関わりをもっているのだろうか。

本稿では、犬の月刊誌『WAN』（ペットライフ社）の1999年1月号から12月号までの1年分の内容を調査し、擬人化される犬をめぐる性差別的表現とジェンダー表現、またそこから導き出されるジェンダー意識について考察する。

2. 総称としての「ぼく」と「彼ら」

日本語の「人間」や「人」ということばには表面上は性別があらわれない。だがその指し示す対象が男（たち）であることはすでに知られている。では、これと同じように性別を特定しないはずの「犬」が実際にはオスを表している場合をみてみよう。次の例は、写真広告のコピーである。後ろの（ ）内で、使用されている写真と広告の概要について補足した。（下線は筆者）

(1) 「ボクのノミ取り薬は、生後6週間から使えるアドヴァンテージスポットにしてください。」（手のひらに乗った1匹の子犬の写真：ノミ駆除剤、バイエル株式会社）⁽¹⁾（5月号）

(2) 「ボク、何歳だ？」（人の視点から俯瞰した1匹の犬の写真：ドッグフード、デビフペット株式会社）（9月号他）

- (3)「ボクたちに会いに来てネ。」(さまざまな犬種17匹が小さく写っている
写真：イベント「スーパードッグカーニバル」のお知らせ) (10月号)

どの広告の写真を見ても、その犬をオスだとは限定できないし、まして(3)では、意図的に複数頭のオス犬だけを集めたという可能性はほとんどない。

言うまでもなく、犬たちが自ら望んで「ぼく」という自称詞を用いているのではないから、こうしたせりふに対する性別の割り当ては、すべて人間側の意識が反映された結果である。実利的に考えると、宣伝広告としては「ぼく」として性を特定するよりも「わたし」としてどちらの性にも当てはまる自称詞を使った方がむしろ効果的ではないだろうか。それにも関わらずあえて「ぼく」が用いられているのは、広告製作者の言語的な男性優位意識によってことばが選択されているためである。別の見方をすれば、「わたし」は特定の状況下では女しか指し示さないのを避けているともいえよう。こうした表現は広告のほか、ポスター等のスローガンや性別を特定しない動物にことばをしゃべらせた場合にもよく見られる⁽²⁾。これは「人間」が男を表していることと同様、犬の世界もオスで代表させることが自然であるという意識のあらわれなのである⁽³⁾。

それでは文中において、犬はどのように表現されているであろうか。多くの場合は、単数形の「イヌ／犬」や複数形の「イヌ／犬たち」、または犬種名が使用されているが、説明文等では「彼ら」が用いられることも少なくない。「彼ら」は、どちらかというと言語的表現として、しばしば名詞の繰り返しを避けるために用いられる。次に4つの例を挙げるが、下線は筆者、()は記事の見出しである。

- (1) すべての話に共通しているのは、イヌを飼うことの素晴らしさと彼らがそばにいてくれる意味、飼い主みんなの命に対するひたむきな姿勢といったものだった。(『私の『愛犬介護日記』』、3月号、p. 62)
- (2) 彼らに見つめられると、その瞳が脳裏にやきつき、記憶のなかにインプットされてしまい、そして二度と忘れることができなくなる。(略)

彼らの歴史はイギリスで発生し、テリアとクロスされ活動的で元気なブルドッグの小型として愛され、また改良されてきた。(中略) この小さなブルドッグはすぐれたガーディアンで、まもなくパリの北方の小さな農家でもみられるようになったという。そして彼らはイギリスよりもフランスで大流行となったのである。“モンマルトルの淑女” たちにとりわけ寵愛された彼らはファッションの一部であり、貴族やアーティストたちのステイタスとしてその人気は高まった。(「パリの市民に愛された“ブルドッグ・フランセーズ”」、4月号、p. 8)

- (3) 特にテリア種などの過激派のイヌの場合、オスとメスを混ぜて飼う場合には、イヌたちの心理をよく観察することが大切になってくる。つまり彼らの行動心理について詳しく、慣れている人でないと難しい。(「多頭飼育 イヌ・人双方にとってのメリット&デメリット」、8月号、p. 60)

- (4) シュミッド夫妻が「スター」という名前のロットワイラー (メス) を飼いはじめたのは二人のお子さんが生まれる直前の七年前。

「(略) ロットワイラーの飼い主を七年間続けてみて、彼らの飼い主への忠誠心が犬のなかでもっともすばらしいものだ」と確信しています。」(「ディスカバリー・ドッグ」、2月号、p. 45)

(1)は「イヌ」を機械的に「彼ら」に置き換えた典型例である。だが、(2)では、記事の本文冒頭から「彼ら」が用いられており、「彼ら」が何を指しているのかは見出しから判断するしかない。この場合はことばを言い換えたというよりも、「フレンチ・ブルドッグという犬＝彼ら」という暗黙の了解を前提として書かれているといえる。また(3)では、初め「オスとメス」と書き、次にこれを受けて「イヌたち」、最後に「彼ら」と置き換えられているし、(4)では、シュミッドさんがメス犬を飼い続けた結果としての感想を述べているのにこれを「彼ら」で受けて、両方とも性別の表記をねじれさせ、巧妙に犬種全体をオスで総称させている。

「彼ら」は日常的なことばとしては気負った感じがして堅苦しくなじまないし、文語表現としてもとってつけたような収まりの悪さが残る。それにも

かかわらず、この語が依然として使われ続けている背景には、英語の三人称複数“they”の日本語への移し変え⁽⁴⁾が大きく影響していると思われるのである。中学で「they=彼ら」と覚えた大学生は、いまだに“they”を機械的に「彼ら」と訳出している。そのとき“they”が女男の複数を指しているように、人ではなく物を指しているように気にする様子もない。こうした誤った訓練を積んだ人が文章を書けば、何の違和感も感じることなく「彼ら」を使ってしまいうのも無理はないであろう。実際のところ、「彼ら」が男を指していることさえほとんどの日本語人は気づいていないはずであるが、仮に“they”を「彼女ら」で総称することになれば、これを自然だととらえる日本語人がどれほどいるであろうか。無意識の語彙の選択は、性差別的な表現（性差別語）の容認を助長するひとつの要因といえるのであるが、このような漠としたことばの使用が、人間だけでなく犬（動物）を表現するときにも用いられているわけである。

「人間」や「彼ら」は男だけを表しているのではなく女も含んでいるのだ、という文法法則に従えば、当然「犬」や「彼ら」にはメス犬も含まれているということになる。そうだとすれば、犬が「ぼく」や「彼ら」として総称されるときには、犬は皮肉にも「擬人化」されているといえるのであろう。しかしながら本当のところは、犬は擬人化されているのではなく「擬男化」されているに過ぎないことが分かるのである。

3. 犬に投影される人間のジェンダー

本来、犬が「メスらしい」「オスらしい」というのは、その外見や性質が、解剖学的な骨格や生物学的性としてのメス／オスの特徴をもつことであり⁽⁵⁾、特に純血統種では犬種のスタンダード（犬種標準）という体高と体重で示される大きさと、からだの線や表情の違いなどとして表される。しかしこれはあくまでも解剖学的、生物学的な意味での「らしさ」であって、決して人間社会のジェンダーとしての「女らしさ／男らしさ」ではない。なぜなら、犬自身がメスまたはオスとしての文化的側面を意識して生きているわけではないし、またそうしたジェンダーイデオロギー社会を作っているわけでもない

からである。

しかしながら、犬たちは単なる犬ではなく、メス犬としてまたオス犬として人間からジェンダーを背負わされているのが現状である。これは、メスであれば「女らしく」、オスであれば「男らしく」あれということである。

ここでは犬に対するジェンダー表現を見るために、犬の交配相手を募集する「お見合いコーナー」の投稿文⁽⁶⁾を検討する。犬の特徴を表すことばを「外見に関する表現」、「非活動的・非積極的な表現」、「活動的・積極的な表現」、「賢さに関する表現」、「中立的な表現」⁽⁷⁾に分類し、表にまとめた。ここで得られたデータを分析しながら犬たちの姿を追ってみたい。

メス犬に関する表現の特徴(表1)は、まず外見や振る舞いの「女らしさ」についての描写である。メス犬については、「かわいい」や「美人」といった外見上の特徴を表す表現が全体の3分の1以上(36.0%)を占め、「おとなしい」や「甘えん坊」などの「非活動的・非積極的な表現」が24.0%と続いている。また「活動的・積極的な表現」と「賢さに関する表現」の比率は全体に低くなっている。

飼い主は、メス犬というのは「元気で賢い」ことよりも、外見がよく女らしい性質をもった「かわいらしくておとなしい」ほうがよりメスら

(表1) メスに対する表現
(総数50)

外見に関する表現 (36.0%)

かわいい／かわいらしい	9
美人	3
毛並みのよい	2
美しい	1
きれい	1
チャーミング	1
プリティ	1
計	18

非活動的・
非積極的な表現 (24.0%)

おとなしい	6
甘えん坊／甘っタレ	3
おだやか	1
優しい	1
レディ	1
計	12

活動的・積極的な表現(12.0%)

元気	3
おてんば	2
やんちゃ	1
計	6

賢さに関する表現 (12.0%)

よい子	2
頭がよい	1
賢い	1
聞き分けのよい子	1
忠犬	1
計	6

中立的な表現 (16.0%)

明るい	4
人なつこい	3
愛想のよい	1
計	8

しく、またメスとして自慢できると考えていることが分かる。だから、雑誌の他のページではよくみられる「おてんば」「やんちゃ」という表現がここではほとんどみられない。メス犬がこうした飼い主の思いに反する行動をとると、「少しはお嬢様になってくれているといいけど」(1月号、p. 111)や「女の子なのに大股開き状態で」(11月号、p. 120)と描写されることになる。また自分の犬が女の子らしくない場合は、「女の子だけれど、男顔なので、リボンなど、可愛く見える物をプレゼントしようかな」(1月号、p. 136)とか、「女の子らしいピンクのリードとおそろいの首輪を」(7月号、p. 123)という気持ちにもなるのである。

それでは、オス犬の場合はどのような特徴(表2)があらわれるのだろうか。目立って数値が高いのは「中立的な表現」で、その他の表現は多少の差こそあれほぼ均一になっている⁽⁸⁾。だがメスと比較してみると、「外見に関する表現」の割合は17.0%とかなり低い。これは逆にいえば、残りの83.0%がオス犬の性質を表す表現であるということになる(メス犬は64.0%)。こうしてみるとオス犬のセールスポイントは外見の美しさよりも、個々の犬の具体的な性質にあるといえるようである。またオス

(表2) オスに対する表現
(総数88)

外見に関する表現 (17.0%)

ハンサム	7
かわいい	3
男前	2
かっこいい	1
毛並みのよい	1
美男子	1
計	15

非活動的・

非積極的な表現 (18.2%)

おとなしい	6
優しい	5
甘えん坊	3
温和	1
気の優しい	1
計	16

活動的・積極的な表現 (15.9%)

元気	5
活発	4
やんちゃ	3
気が強い	1
わがまま	1
計	14

賢さに関する表現 (14.8%)

おりこう	5
よい子	5
賢い	2
物覚えのよい	1
計	13

中立的な表現 (34.1%)

人なつこい／人が好き	11
明るい	10
性格がいい	4
愛嬌たっぷり	1
お人好し	1
気の長い	1
ノーマス	1
陽気	1
計	30

犬の場合は用いられている表現が多様多様であることも特徴のひとつである。

メス犬にせよオス犬にせよ、飼い主は自分の犬が一番すばらしいと思っているはずである。また「お見合いコーナー」では純血統種しか扱わないので、飼い主が犬の外見の美しさを自慢に思っているのは明らかである。こうした等しい条件下で、オス犬の性質が強調される、つまり「男は外見よりも中身で勝負だ」ということが、オス犬に人間のジェンダー意識が投影されている証左であろう。結局のところ、犬たちは「男は中身、女は外見」という人間のステレオタイプ化された価値基準を負わされて表現されているのである。

4. 犬の性と生殖、セクシュアリティ

犬はあくまでも動物であるから、「性と生殖」や「セクシュアリティ」は本来的には不適切な言い回しなのかもしれない。しかし、犬が擬人化して表現されるとき、当然そこには人間と同様の表現形態を伴う。またこのとき、犬を表す表現の中に、人間の性や生殖、セクシュアリティについての偏見が持ち込まれるのである。この章では、メス犬とオス犬それぞれに特徴的にあらわれる「性と生殖」または「セクシュアリティ」に関する表現を取り上げる。

まず、犬の性（セックス）に関して、先の「お見合いコーナー」をみてみたい。ここでは、「繁殖」「交配」という専門用語も用いられているが、たいていは「お嫁さん」「お婿さん」⁽⁹⁾「恋人」「結婚」ということばで表現される。こうした擬人化は即物的な「交尾」ということばを隠すために婉曲に用いられている。そのため、「お嫁さん」「お婿さん」は単に繁殖の相手のことを指しているに過ぎないから、人間社会のように差別的に用いられるわけではない。それは、結婚することで女が負わされる嫁役割がメス犬にも強制されるとき、メス犬が舅姑問題に悩むことなど起こりえないからである。しかしながら人間の結婚イデオロギーの中で、「普通で正しい」状況を表す言い回しである「嫁にこないか、ボクの所へ」（4月号）といったヒットソングの一部はそのまま転用されている。その一方で、「普通ではなく望ましくない」状況を表す言い回しを自由に使うことが許されているのではなさそうである。例えば、「(婿)養子にきてくれる男の子を募集します」と書いた場合、オス犬の

飼い主はおそらく不快になるに違いないからである。

華やかさや幸福感を漂わせる「お嫁さん」ということばは、実は「結婚」ではなくて子犬の出産を意図していることは間違いない。犬にはこどもを産むかどうかの自己決定権などなく、こどもを産みたいとも産みたくないても思っているわけではない。したがって、「かわいくて健康な赤ちゃんうむよ」（4月号）というメス犬のことばは人間の押し付けに過ぎないのである⁽¹⁰⁾。

さて、メス犬の生殖に関する表現の特徴は、母であることと子育てである。子犬を産んだ後に本能よろしくメス犬が子犬を育てると「母性的である」と言われ、反対に子育てをしないと「母性的でない」と言われることがある。このときの「母性」はメス犬が子犬を育てるという動物学的な「母性行動」のことを指しているのではなく、犬の情緒面を強調しようとして用いられる表現である。すなわち、「メス（女）」というものはこどもを産むことに喜びを感じ、また生まれてきたこどもには無条件の愛情を注いで可愛がって育てるものであり、そうした特徴はオス（男）にはない生得的な行動、感情、性質である」ということである。

例えば、妊娠中の犬の写真の説明文には「妊婦さんらしくお腹がパンパンになったベルク。表情もどこか母親の顔に」（5月号、p.70）とある。果たしてどれだけの人が犬の顔だけを見て母親としての表情を感じとることができるであろうか。また「犬って人間と同じですよ。教えなくてもちゃんとおっぱいを飲ませて、体の下にもぐった子のために起き上がってミルクを与えています。すごいと思います」（3月号、p.144）は、「女は本能からこどもに乳を与える」と読み替えることができる。メス犬を擬人化することで、犬にとっては本能的な母性行動を人間の社会・文化的な母性イデオロギーへと変化させ、それが「女は母になりなさい。そしてこどもを育てなさい」という脅迫的メッセージとなって人間の女に返ってくるのである。

高等な動物になればなるほど、人間と同じような複雑な感情をもちうるだろうし、犬に関してもその例外ではない。しかしながらこうした表現の中に潜んでいるのは、科学的な事実というよりは、むしろ性差別（ジェンダー）イデオロギーを作りだすための「みせかけの事実」であることが多い。言い

換えれば、人間の生物学的・社会的行動を説明するために動物の生態が引き合いに出され、逆に動物の生態を擬人化して表現することで、そうしたイデオロギーを補強・強化していることがあるのである。

犬に関してではないのだが、父と子育てについて、動物の生態を人間に置き換えて説明している一般的な例をここで紹介したい。これは現在も連載中の「ムツゴロウ王国群犬だより」(6月号)の冒頭の部分で、書き手は「王国」の石川利昭氏である⁽¹¹⁾。

うれしい話題があった。何でも政府の方針で、子育てをしない男は父親ではない、ということになったようで、大々的に有名人を使って広報にತ್ತめていているらしい。私は両手を挙げて喜んだ。「私は一度も、子供のおしめを替えていない、父親ではないのだ、これで子供たちの高い学費を払わずに済む……」

大学生の娘はあきれながら「父でもおじさんでも良いから、授業料よろしくね!」と言って政府の意向を無視する返事をしてきた。

群れ型の生きものの雄は、基本的に子育てをしない。強い雄がたくさん雌を囲いこみ、ハーレムを作るので、子供の数が多すぎて手がまわらないのである。それに比して単独型のタヌキやキツネは巣穴の女房、子供のためにせっせと餌を運び、見張りをし、子供の遊び相手をしている。人間は群れタイプである。本来ならばどこかの国の大統領のように多数の妻を横にはべらせ、せっせと子作りに励むべきである。しかし、人類の文明と文化は一夫一婦制を発明した。強い男も弱い男も公平にという博愛主義がキツネ型の育児法を男たちに強制してきている。でも、それは夫婦の問題であって、政府がどうのこうのと言うべきものとは思えないのだが。

一部だけを取り上げれば動物の行動学的事実が書かれているともいえるのだが、この「事実」が少しずつ変化しながら最終的には人間の男のあり方(生き方)にとってかわっているのが分かる。人間は群れ型の生き物ではあっても動物のオスとメスの集まりではないし、人間の文明と文化は男たちにキツ

ネ型の育児法を強制しているのでもなく、またこれは博愛主義でもない。書き手はこの文のすぐ後に「女房にすべてを任せていた私の弱き反論」と続けているが、これは「論拠にとぼしい言い訳」に過ぎない。このような論理は男の都合を正当化するために頻繁に用いられ、女に母親としての性役割やジェンダー役割を強いているのである。

一方、オス犬の表現の特徴は、性欲と性的な能力、それにつながるセクシュアリティについてである。犬の世界でもオスは「身体は小さいが男としては立派、と言うか、要するに超女好き」（5月号、p.69）であったり、「プレイボーイ」（1月号、p.164）であったり、「熟女が好き」（4月号、p.138）な生き物らしい。では、そうでない場合はどのように描写されるのであろうか。次に挙げるのは、1歳半のミニチュア・ダックスフンド（オス）がうまく交配できなかったという悩み相談の一部である。

「うちの子ってもしかしたら不能？」

（略）しかし初回のお見合いは失敗。ぜんぜん相手に興味を示さないのです。初回でしたし、行き当たりばったりのお見合いのせいもあったので、2回目は心してかかりました。（略）逆にメス犬の方がマウンティングしてきても、唸ってイヤがるだけです。3回目も同じでした。これはもう女嫌いと思えませんか。（「犬の行動心理学」、2月号）

メス犬に性的な興味をもたず交尾できないオスは「女嫌い」であり「不能」かもしれないというのである。

オス犬は発情期のメスによって発情を引き起こされるのであるから、オスがいつでもどんなメスでも追う（＝発情）と考えるのは間違いであるし、またその行動を「（女）好き」と捉えてよいのかかなり疑問である。うまく交尾ができないオス犬を「女嫌い」や「不能」ということばで説明しようとするのは、たぶん、人間に喩えることによって、自分の犬がうまく交配できないことの何らかの手がかりを得ようとしているからであろう。どちらにしても、オス犬はメス犬に対して常に発情している状態であるというのは人間側から

の表現なのであって、これは単に女の後を追う男の姿をオス犬に重ね合わせているだけなのである⁽¹²⁾。

オス犬に対してみられる性行動の積極性を示す表現は、メス犬に対してはまずみられない。それは人間の性行動において男のみが性に積極的であると規定されており、「男は女が好きなものだ」というステレオタイプがあるからである。そしてこのステレオタイプは、ヘテロセクシュアル（異性愛）の強制につながっている。

このように、オス犬に対して性に積極的なヘテロセクシュアルが強く意識されると、オス犬には次のような固有の表現が生じることがある。例えば初対面の飼い主にその犬の性別を尋ねることがある。オス犬の場合、たいていは「オス（男の子）です」という答えが返ってくるのだが、ときに「うちの子はおかまなんです」⁽¹³⁾と言う飼い主がいる。このとき「おかま」とは、不妊手術をしているオスを指している⁽¹⁴⁾のだが、メスの場合は「中性」ということばを使うことはあっても、「おなべ」とはまず言わない。このような表現の差異は、人間の男の同性愛者、トランス・セクシュアルやトランス・ジェンダー⁽¹⁵⁾の存在が女のそれに比べて目立っていて分かりやすいからなのである。

それでは、なぜ不妊手術をしたオス犬は「おかま」になるのだろうか。「おかま」の周辺語のうち一般によく知られていることばとしては、「ゲイ」「ホモ」「ニューハーフ」が挙げられる。まず「ゲイ」は差別的ではないことばであり、正攻法の主義主張が感じられる。また性転換手術（または準ずる手術）をしていないというイメージも強いために、「うちの犬はゲイだ」とは使いにくい。「ホモ」は「おかま」と同じように強い差別意識を含んだことばであり、揶揄嘲笑するときに、またふざけて言うときには「使いやすい」。だが、どちらかというと性的な指向だけを強調した表現であるため「うちの犬はホモだ」とはやはり使えない。また「ニューハーフ」⁽¹⁶⁾は、化粧をした整った顔立ちの異性装者（トランス・ヴェスタイト）を指しているために、このことばを動物に使うためにはそれなりの文脈が必要となるであろう。

そして「おかま」は、日常的なことばとして定着・浸透していること、差

別語であるために遊びとして使えること、性的な指向よりも「男でないこと」の含みが強いこと、そして外見上は男のままであることをすべて満たすことばとして選ばれたのではないだろうか。そしてこのとき「うちの犬はおかまだ」という本当の意味は、「うちの犬は不妊手術をしていて、それによって男ではなくなった。ただ、性的指向や外見が変わったわけではない」ということなのだ。要するに、オス犬が不妊手術をしている状況を伝えるときには、飼い主はどのことばを用いたらより分かりやすく効果的かということのことばの微妙な違いから判断しているのである⁽¹⁷⁾。

私はここであえてオスの「不妊手術」と表記しているが、これは一般的に「去勢手術」と言われているものである。男の飼い主がわが身と重ね合わせてオス犬の手術をしたくないというのは、ひとつにはこの「去勢」ということばの響きからきていると思われる。つまり「去勢」は、セックス（＝性行動）としてまたジェンダー（＝男らしさ）として「男の勢いを取り去る」ことであるため、これを「男でなくなる」と解釈するのである。メスの場合は文字通り「妊娠を避ける」ための「避妊手術」であり、直接的に「女でなくなる」ことと同義ではない。

犬の不妊手術は珍しいことではないし、犬を紹介するときに手術の有無を言う必要もない。それにもかかわらず、オスの場合のみ「おかま」とであるという表現が用いられているのは、結局人間のセクシュアリティへの歪んだ意識がそのままオス犬へ向けられている証拠なのである。

5. 性別と名前

自分の息子に「悪魔」という名前をつけることをめぐって賛否両論がたたかわされたことがある⁽¹⁸⁾。その中で再確認されたのは、名づけは付けられる本人の好き嫌いとは無関係に行われ、よく言えば親の望みや願いをその名前に託しているものであり、また悪く言えばそうした親のエゴの押し付けでもあるということだったと思う。動物の場合は、飼い主がどのような名前をつけようとも法的な制約はないし、また動物自身はどんな名前であっても自分の呼称としてそれを受け入れるしかない。しかし、飼い主の望みや願い、ま

たエゴの押し付けという点では人間の場合と同じであり、動物の名づけにおいてはそうした思いがむしろ誇張された形であられることがある。

それでは飼い主は、自分の犬にどのような意味を込めて名づけをしているのであろうか。「うちの犬こんな犬」は、飼い主が自分の犬の写真にコメントをつけて投稿するコーナーである。ここに登場した犬のうち、性別と名前の明らかなメス犬197匹、オス犬236匹、計433匹の性別と名前の関係について調べてみた⁽¹⁹⁾。

(表3) 性別と名前の関係

	メス	オス	全体
性別にそった名前	119 (60.4%)	159 (67.4%)	278 (64.2%)
性別に反した名前	27 (13.7%)	25 (10.6%)	52 (12.0%)
性別を特定しない名前	51 (25.9%)	52 (22.0%)	103 (23.8%)
合 計	197	236	433

(表3) にまとめた性別と名前の関係の結果をみると、その多くがメスには「メスらしい」(60.4%)、オスには「オスらしい」(67.4%) 名前がついていたが、その名前をみただけでは性を特定できないものが全体では23.8%と比較的高い数値となった。また人間ではありえないことだが、性別に反する名前の選択をしている飼い主(12.0%)も少なからずいることが分かる。これを見ると、ほとんどの飼い主が犬の名前をその性別にそって選んでいる一方で、3分の1以上の飼い主は人間の名づけのように性によってきれいに二分される⁽²⁰⁾ ような明確な基準で名前を付けていないことが分かる。このような飼い主の意識を分析するために、名づけという点からいくつかの視点を提示したい。ここでいう「飼い主の意識」の分析とは、飼い主が犬を家族の一員と考えているかどうかといったことや、飼い主がジェンダー・フリーの考えをもっているかどうかという分析ではないことをお断りしておく。

まず大多数の飼い主は、名づけにおいて犬を人間社会の規範の中でとらえ、自分の犬の性別に合わせて名前を選んでいく。例えば、「花」「ひめ」「マリア」

には「かわいらしさ、やさしさ、やわらかさ」という「メスらしさ」が、「竜馬」「けん太」「レオ」には「たくましさ、元気のよさ、強さ」という「オスらしさ」への願いが込められている。飼い主は、自分の犬が性別にそった「らしさ」をもってほしいと考えており、そこには人間の子どもの名前をつけるときと同じような、明確なジェンダーの価値観が一番強くあらわれているといえる。

次に、一部の飼い主は、名づけにおいて自分の犬を永遠の小さなこどもとして位置づけている。家畜動物は老いて死ぬまで人間の世話なしには生きてゆくことができない。そこで犬をこどもとして扱って、かわいらしい（こどもらしい）響きがする名前を選ぶのである。こうした意識は、性別とは無関係に「ちゃん」づけで犬を呼ぶ意識に等しい。またこれは終助詞の用いられ方をみても明らかである。人間の場合、書きことばにおいてはかなり誇張された形で終助詞に「性差」が見られるが、「うちの犬こんな犬」の犬のせりふからは顕著な「性差」はみられなかった。もちろん終助詞によって極端に「らしさ」が強調されている例もあるが、どちらかというともスもオスも「こどもことば」で書かれていると解釈したほうが自然である。

犬をこどもとしてとらえている飼い主も、自分のつけた名前は「メス／オスらしい」と思っているのかもしれないが、客観的には、「ラブ」「ラッキー」のように性別を問わず用いられる名前であったり、「ペチカ」「こころ」のように性別を特定できない名前なのである。また、(表4)をみても分かるように、433の名前のうち、カタカナと横文字表記の名前が70.4%、また日本語以外の響きをもつ名前は63.5%となっている。つまり多くの名前がいわゆる日本的な名前ではなく、必然的に性別がぼかされてしまう⁽²¹⁾。このような飼い主はあいまいなジェンダーの価値観によって名づけを行ったと考えられる。

最後に、ごく少数ではあるが、飼い主は名づけにおいて、犬を人間になぞらえることなくあくまで動物としてとらえていることである。この場合、犬の性別と反対の性を表す名前をつけることに抵抗がない。メス犬の「しんべエ」、オス犬の「くるみ」などはジェンダー意識をまったく排除した名づけであり、人間の場合はこうしたことはまず起こりえない。

(表 4) 犬の名前の表記と響き

	メスの名前	オスの名前	全体
漢 字	21 (10.7%)	43 (18.2%)	64 (14.8%)
ひらがな	33 (16.8%)	31 (13.1%)	64 (14.8%)
カタカナ	140 (71.1%)	152 (64.4%)	292 (67.4%)
横文字	3 (1.5%)	10 (4.2%)	13 (3.0%)
日本語の響き	76 (38.6%)	82 (34.7%)	158 (36.5%)
日本語以外の響き	121 (61.4%)	154 (65.3%)	275 (63.5%)

*「ごん太」などの漢字まじりの名前は「漢字」に、また「しんべエ」はひらがなに、「ユーくん」はカタカナに分類した。

このように見ると、犬の名づけの背景には飼い主の自分の犬に対する、またジェンダーに対するさまざまな意識が見え隠れしている。名前は単なる呼び名ではなく、その犬の個性の一部である。「メスらしい（女らしい）」名前を付ければ、それは直接その犬に「メスらしさ」を望むことになるし、「メスらしく」ない名前を選べば、その犬は「メスらしさ」で規定される枠組みを外れた行動が許容されることを暗に意味している。どちらにしても、犬の名づけには極端すぎるほど遊びとデフォルメを行うことが許されているから、人間であれば恥ずかしくなるような極端にジェンダー化された名前（メスの「莓」、オスの「しし丸」）や、反応に困るような極端な脱ジェンダー化された名前（メスの「ジキル」、オスの「バンビ」）も可能なのである。人間と違って犬（動物）の世界は、その犬の本来の個性に合わせた名づけができる自由な世界なのかもしれない。

6. おわりに

犬に関する表現をめぐって、擬人化による性差別語のあらわれかたや犬に対する人間のジェンダー意識の投影について検証、分析を行ってきた。これらは犬を介在させたところの人間どうしのコミュニケーション上の問題として解決されねばならない。それでは上記のような人間の性差別意識やジェンダー・バイアスが投げかける影は犬にはまったく無関係なのであろうか。この論考を終えるにあたって、こうした人間側の意識が犬の生きる権利と大き

く関わっていることを述べておきたい。

誤解を恐れずに言えば、犬は人間のことばをその語気や抑揚、リズムとともに理解する動物である。よく比較される猫との違いは、こうしたコミュニケーションのとり方が飼い主との関係に直結していることであろう。つまり飼い主が適切な方法で適切な訓練を行えば、犬は家族（群れ）の中での自分の位置を知り、その関係性の中で幸せに暮らしてゆけるのである。

だが、例えば、そうした犬とのコミュニケーションの中に「おまえは男の子なんだからメスなんかには負けるな。情けないなあ」という人間のジェンダー意識が入り込むとき、そのオス犬の生活はなんらかの制約や強制を受けないのだろうか。また「せっかくメスに生まれてきたんだから（子宮を）使わないともったいないじゃない。だから一度はこの子にこどもを産ませたい」といって出産を強要されるメス犬⁽²²⁾の存在とは一体なんなのだろうか。ここに挙げたどちらの例も私が実際耳にしたことばである。ここで問いかけたのは、人間のこうした表現の中にあるジェンダーへの過度の思い込みは、最終的には犬たちの生や性に直接・間接の影響を与えているのではないかということだ。そのような人間の自己中心的なエゴイズムが、犬の生活全般を支配する規範を作ることにつながりかねないと思うのである。

註

- (1) 当時のこの広告の猫版のコピーもやはり「ボク」であったが、2000年では、成長した2年後の猫と当時の子猫をダブらせつつ、「ワタシ」を用いた広告も作られている。（註3を参照）
- (2) 今回調査の雑誌でも、「あ、ママだけ何食べてるの、ボクもちょーだいよ」（8月号、p. 11）、
「ぼくたちもがんばらなくっちゃ」（同号、p. 27）など、性別を特定しない場合に「ぼく」が登場している。
- (3) 男性優位主義的なことばの使用はあらゆる動物を表現するときにみられるが、別種の動物が登場するときにはその動物の種類によってジェンダー役割が割り当てられる。例えば「猫が女、犬が男」というように、より「女らしい」動物が女に、より「男らしい」動物が男で表される（佐々木恵理、現代日本語研究会：98年蓼科ワークショップ研究発表）。今回の調査でも、「ミミーちゃん」（猫：まつげと花飾り）と「ピタワンくん」（犬：

濃いまゆげ) (日本ペットフード)、男に扮した犬のふきだし「ワンダフル」と女に扮した猫のふきだし「ニャンともいいわね」(NISSO) のような割り当てが行われている。

- (4) 英語と翻訳語としての日本語との関連を簡単に説明したい。まず英語の自称詞には性別があらわれないので、“Can’t, can’t, can’t. Well, what CAN I do?” (だめだめだめって、じゃあなんだったらやってもいいの?) と子犬に言わせても、“I” の性別を特定することはない。だがこのことばを写實的に表そうとして、日本語であえて主語をたてたときに「じゃあなんだったらボクやってもいいの?」と性差別的表現が表出する可能性がある。

また英語では、犬種別の本などにおいては、オス犬は“dog - he”、メス犬は“bitch - she” で表記されるが、総称は“dog - he”である。そのため、例えば“a Golden puppy - he” (ゴールデン・レトリバーの子犬-彼) というような日本語にはない性差別表現になる (日本語では性別を特定しない名詞を「彼」で受けることはまずない)。しかし反対に、英語では“he and she - they” (彼と彼女-ふたり) というプロセスには性差別的な要素はないのに、これを「ふたり」ではなく「彼ら」と訳すことで日本語では性差別語へと変化する。今回調査した雑誌では、「ウォータートライアルトレーニングマニュアル」(ビルギッタ・シェルマン・ラーション、ステファン・ラーション執筆) の次の文章が序文のような体裁で翻訳されている (2月号)。「ところで、メスイヌの飼い主のみなさん、ここにひとつお詫びしたいことがあります。本書では私はイヌを『彼』と表現していますが、これはけっして性差別ではありません。単に簡易化のためですのでご了承ください」このように「お詫び」されているのにも関わらず、11月号まで続くこのマニュアル紹介の中で、実際の日本語には「彼」は一度も登場せず、その代わりに「彼ら」という性差別語が用いられている。

- (5) 犬の生物学的性としての「メスらしさ」とは、支配欲・テリトリー意識の低さ、攻撃性の弱さ、服従性の高さなどを指す。この逆の性質が「オスらしさ」である。
- (6) 「お見合いコーナー」では、犬種、性別、年齢と犬のセールスポイント (またごく一部には相手への要望) が簡単に紹介されている。中には、写真やイラスト付きのはがきが投稿したままの形で掲載されているものもある。今回の調査では、犬種によって異なるからだの大小と健康に関する記述を除いた。
- (7) ここでいう「非活動的・非積極的な表現」はいわゆる「女らしい」性質に準ずる表現を、

「活動的・積極的な表現」はいわゆる「男らしい」性質に準ずる表現を指す。「中立的表現」はそのどちらにも属さないと思われる性質である。また、「非活動的・非積極的な表現」と「活動的・積極的な表現」は、それぞれが肯定的または否定的な意味あいをもつということではない。例えばオス犬の「おとなしい」という「非活動的・非積極的な表現」は、オス犬の否定的な側面を意味しているのではないし、メス犬の「元気」という「活動的・積極的な表現」がメス犬の否定的な特徴を指しているわけではない。

- (8) オスの場合、「非活動的・非積極的な表現」の割合が若干高めであるが、これには次のような理由が考えられる。一般に、オス犬は支配的で攻撃性が高く、気性が激しい。そのためこうした生物学的な性質がしばしば問題行動につながるため、繁殖のための情報としては「おとなしくて優しい」ことも相手によい印象を与える。ちなみに問題行動とは、噛む、吠える、物を壊すことなどを指し、たいていの場合は飼い主側の責任であることが多い。問題行動のうち、部屋の中のあらゆる物を壊しつづける（特に成犬前の）犬をふざけて「破壊大魔王」（総称）と呼ぶ。

- (9) 総数99のうち95の投稿文で「お嫁さん」および「お婿さん」が用いられている。

- (10) コアラの「ブリーディングローン」（種の保存のために動物園が貸し借りをを行う制度）を伝える記事（『朝日新聞』1997年3月26日）では、見出しに「ママになりたい」と書くことで、あたかもメスのコアラ自身がこどもを望んでいるかのような擬人化が行われている。言うまでもないことだが、こどもを期待しているのは人間のほうである。

- (11) これは、厚生省がつくった少子化・子育て対策ポスター（1999年3月1日）のコピー、「育児をしない男を、父とは呼ばない」に対する発言。このコピーに対して、当時賛否両論があった。

- (12) 先の石川氏は、発情期のメスの匂いをかぐだけで実際の交尾をさせてもらえない犬には「男の悲しさがたよう」と書いている。（5月号）

- (13) 犬友達を募集したはがき（6月号、p.159）には、「僕（ピレニーズ）のお友達募集です」に続いて、「H.10.12.29生（おかま）1才3ヶ月」と自己紹介させている。また、2000年10月27日放送のペット情報番組『ポチたま』（テレビ東京）では、タレントの神田うのが自分のヨークシャー・テリアを「神田ロケットで一す。おりボン付けてますけど男の子で一す。でもタマタマないのね。おかまで一す」と紹介している。

- (14) 連載のエッセイ「コラッ！コロエ」（書き手：夏生）には、ケロンパという名の「おか

ま」が登場する。7月号では、コロエのこいぬ誕生を想像して「よしよしよし…日本一のおかま犬にしてあげるからね」とある。この場合は不妊手術とは無関係であり、自己表現として「おかま」ということばを選んでいるケロンパがそのまま犬に用いただけである。

(15) トランス・セクシュアルもトランス・ジェンダーも、自らの身体的性に違和感を感じている人(性同一性障害)を指すが、一般に、前者は性転換手術(または準ずる手術)を望む人または行った人を、後者はそれを望まない人のことをいう。

(16) 「ニューハーフ」については次の例を挙げておく。「メインクーンのニューハーフ！」(写真と文字を入れられる猫の名刺の例)('にゃんぷれ'ねこたま通信vol. 3、(株)北北西、1998年)。ここでは「ニューハーフ」が肯定的に用いられていて、「不妊手術をしてオスではなくなったが、かわいい猫」という意味になる。

(17) 性的指向やトランス・セクシュアル、トランス・ジェンダーを表すさまざまなことばは、一部のことばを除いて、たいてい偏見とその差別性ゆえに明確な定義があるわけではない。本論では、そのことばが何を指しているかではなく、どのようなイメージで用いられているかに焦点をおいている。

(18) 1993年、東京都昭島市の夫婦が息子に「悪魔」という名前をつけて出生届を提出したが、法務局の「妥当ではない」との判断に、夫婦は不服を申し立てた。最終的には、夫婦側が名前を変更し、決着した。

(19) どちらの性別を指しているか分からない名前に関しては、日ごろ多くの犬に接している犬を飼っている友人7人に協力してもらった。7人中5人以上のスコアをとったメス/オスの名前のみを有効とし、その他はすべて性別を特定しない名前とした。動物の名づけの由来は本来飼い主の主観的なイメージからくることが多いし、また協力してくれた友人にも「感覚的」な判断を求めている。こうした理由から、ここで出た数字はあくまでもひとつの目安であり、実際には、「性別を特定できた」名前が性別を特定しない名前であることが十分ありうる。

(20) 人間の場合でも両性に使われる名前はあるし、最近ではかなり創意にとんだ名前をつけることもあるが、全体からいうとごくわずかである。

(21) 事実をあいまいにするカタカナ語については、「歪められる英語の意味と犯罪の隠蔽」(佐々木恵理、『ことば』20号、現代日本語研究会、1999年)を参照のこと。

(22) 純血統種の犬は用途にあわせて人為的に作出されてきたという経緯がある。その意味において、繁殖を行う場合には、血統の管理、すなわちその犬種特有の遺伝的問題を熟知し、またスタンダードにみあった外見と性格を考慮した上で交配すべきである。かわいから、子犬の顔がみたいからという理由だけで、知識のない素人が安易に自分の犬（家庭犬）にこどもを産ませるのは問題である。もちろん最終的な決断はその飼い主の良心にまかせるしかない。

参考文献

- 秋月智朱監修『愛犬(うちのこ)の命名辞典』小学館、2000年
- 動くゲイとレズビアン研究会編『ゲイ・リポート』飛鳥新社、1992年
- 遠藤織枝編『女性の呼び方大研究』三省堂、1992年
- 『思想の科学』No.17、特集：セクシュアリティの愉しみ、思想の科学社、1994年
- 中村桃子『ことばとフェミニズム』勁草書房、1995年
- 伏見憲明『プライベート・ゲイ・ライフ』学陽書房、1991年
- Bauer, Nona Kilgore *The World of the Golden Retriever: A Dog for All Seasons*, Neptune, NJ, T.F.H.Publications, Inc. 1993
- Frank, Francine and Frank Anshen *Language and the Sexes*, NY, State Univ. of New York Press, 1984.『英語にみる性とことば』吉村秀幸、中村則之訳、関西大学出版部、1995年
- Russ, Diane and Shirle Rogers *The Beautiful Bernese Mountain Dogs: Complete American Handbook*, Loveland, CO, Alpine Publications, 1993
- Shear, Marie *Solving the Great Pronoun Problem: 14 Ways to Avoid the Sexist Singular, The Nonsexist Word Finder: A Dictionary of Gender-Free Usage*, Rosalie Maggio, Phoenix, NY, Oryx Press, 1987.『性差別をなくす英語表現辞典』笠井逸子訳、ジャパントイムズ、1990年

* なお、犬に関する参考文献は引用したものを除き、ここではすべて割愛する

(ささき えり)